

スイス 音楽物語

アヴァンシュ・オペラ・フェスティヴァル

——今年破産した1995年から続く音楽祭

古代ローマ遺跡での オペラ・フェスティヴァル

今年の夏はスイス連邦中の音楽祭やフェスティヴァルが開催中止となっている。スイスにある古代ローマ遺跡の野外劇場を使ったアヴァンシュ・オペラ・フェスティヴァルでは、今年は野外オペラが観られないのだが、これは新型コロナウイルス流行前の1月16日、同フェスティヴァルの破産が発表されたからである。

スイスの首都ベルンから北西に約1時間車を走らせると、小高い丘が見えてくる。古代ローマ人の天文学による統計から、雨が降りにくい場所に建てられたというアヴァンシュ野外劇場は、ヴェローナの約4分の1の大きさなので、より臨

場感が伝わりやすい。そこに目を付けて、天候が不安定なスイスでも、オリジナルの古代ローマ遺跡で野外オペラを観てもらおうと、1995年にヴェルディ《アイダ》でオペラ・フェスティヴァルを始めたのだった。初回は全6回公演で、のべ3万6000人を集客した。翌年のビゼー《カルメン》も全7回公演、のべ4万2000人が観劇した。第3回は、アルフレード役のマルセロ・アルバレスやジェルモン役のレオ・スッチ等、スター歌手が登場するヴェルディ《椿

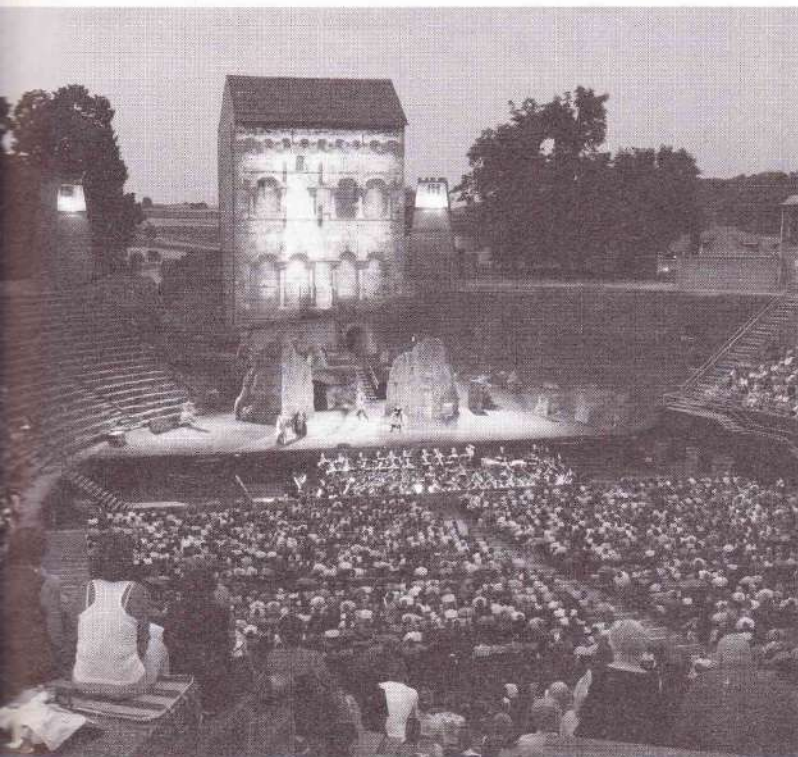
姫》と、ブッチーニ《ボエーム》、ヴェルディ《レクイエム》の3演目で全11公演を打ち、のべ4万8000人を集めた。第4回もカーティア・リッチャレリがリユーを歌うブッチーニ《トウーランドット》と、ロッシーニ《セビリアの理髪師》で合計11回、のべ3万7000人が訪れた。

発展するファスティヴァル

第5回となる1999年からは、筆者も実際に観劇した。この年はマチェラー

タ音楽祭との共同制作で、レンツォ・ジャッキエーリ演出のヴェルディ《ナブッコ》だった。リコ・サツカーニの指揮するローザンヌ・シンフォニエッタの演奏に、題名役はアルベルト・ガザレとシルヴァーノ・カロリーのダブルキャストで、両日聴いた。ガザレは急上昇中、カロリーは老いが隠せなかったが、イタリアの世代の比較ができておもしろかった。しかし斥巻はアビガイッレ役のゲーナ・デイミトローヴァだ。この6年後には世を去ってしまうとは想像できないほどのパワーと模範的歌唱で、ブルガリア出身の彼女が、イタリア人よりもイタリアの伝統を忠実に体現し、野外劇場でも周りに散ってしまわず、突き刺してくるような存在感が光るオーラが忘れられない。それだけでも歴史的公演と呼べよう。この年は追加公演が必要なほどの成功を収め、8回公演で5万2000枚のチケット売り上げを記録した。

第6回は《アイダ》に戻り、ロベルト・ラガナ・マノーリの美的な新演出が鮮やかに思い出される。指揮者アンドレア・リカータが昨年と同じシンフォニエッタ・デ・ローザンヌをキビキビと率いて、野外公演にありがちな間延びする演奏を許さなかった。まず豪華なのはアマナスロで、ジョルジョ・チェブリアンとホアン・ボンス、アルベルト・ガザレのトリプル・キャスト、三者三様に満足させてくれた。アマネリスは、前年にフェネーナを歌ったサラ・ムブンガが大抜擢されたが見事に大役をはたし、当時



アヴァンシュ・オペラ・フェスティヴァルの《トロヴァトーレ》から ©Avenches Opéra

スイス
NOW

新型コロナウイルス
関連情報

座席指定のあるイベントは 7月から解禁か？

スイス連邦政府は、新型コロナウイルスによる医療崩壊を回避したとし、第一緩和政策として4月27日から美容院や花屋、不急の医療施術やマッサージに加え、ゴルフ場やテニスクラブを再開した。5月11日からは第二緩和政策として、非生活必需品店や飲食店、義務教育機関を解禁とした。しかしイベントについては依然として緩和されないことから、最後まで可能性を探していたチューリヒ歌劇場もシーズンを閉幕し、ルツェルン音楽祭もとうとう全公演をキャンセルした。5月16日から、結婚していないカップルでも国境を越えて会えるようになり、一部の国境線を隔っていた金網が撤去された。

5月30日から5人以上の集合禁止措置が緩和され、30人までの集合が可能になった。6月6日から300人までのイベントが解禁となるため、各団体・ホールで、即興でのプログラムを検討し始めている。6月8日からは第三緩和政策として、高等教育機関なども再開される。1000人以上のイベントは8月末まで引き続き禁止されているが、サッカーの試合やクラシック・コンサートなど、座席指定のあるイベントを7月から解禁にするという議論が交わされている。その際、万が一、新型コロナ感染者が出た場合、携帯電話にダウンロードするアプリで、周囲にいた観客に自己隔離を要請する対策が取られるという。



中止が決まった今年のルツェルン音楽祭「夏」のプログラム。8月14日から9月13日まで開催する予定だった

中止が決まった今年のルツェルン音楽祭「夏」のプログラム。8月14日から9月13日まで開催する予定だった

つたものの、2011年にはローザンヌ歌劇場総裁のエリック・ウイジェがインテンダントに就任したため、「地方歌劇場の夏の催し」という印象も与えるようになってしまった。雨天対策として作った舞台上の巨大な透明の屋根も、毎夏の設置経費がかさみ、最後には大型スポンサーのクレディ・スイス銀行が撤退した。それを受けて、2年ごとの開催で巻き返しまでと一歩だったが、最終的には総額20万スイスフランの負債を抱え、24年の歴史に幕を閉じたのだった。

天候次第の野外劇場

第7回の2001年は天候に恵まれず、筆者も被害を被った。パトリシア・パントン演出のヴェルディ《リゴレット》でリコ・サッカーニの指揮棒が振り下ろされたものの、数分で書行ぎが怪しくなり、マントヴァ公爵のアリア（あれか、これか）のワンフレーズで中止に

なってしまった。雨の滴が一滴でも落ちると、「高価な楽器を濡らすまい」とオーケストラ団員が舞台の下に避難してしまふからだ。そのあとは、限られたカテゴリーのチケットを持つ観客のみ近くのホールに移り、ハイライトをピアノ伴奏で聴けるのだが、その準備が整うまでに長い時間を要するのだ。ただでさえ、日没を待って21時15分に開演するため、終演は日付線を超えてしまう。開演前の雨や、天気予報によって中止を決定する場合は別の日に振り替えられようになったが、ホテル予約などもあり、出直すのも容易ではない。ジルダには、パトリシア・ア・チヨフイ、マントヴァ公爵はステファノ・セツコ、マツダレーナには有名になる前のアンナ・ボニタティブスらが名を連ねていたのに、野外劇場で聴けな

かったのは残念だった。

第8回はニコラ・マルテヌッチをカヴァラドッシに迎えたブッチーニ《トスカ》と、スイスの英雄物語にロツシーニが作曲した《ウイリアム・テル》だった。この年はオーケストラにトリノ・イタリア放送交響楽団（現在のRAI交響楽団）を招いた。後者は上演機会が少ないため、昔、同演目をチューリヒ歌劇場で大成させたネッロ・サンティが招かれ、野外劇場でしか実現できないような臨場感をレト・ニツクラが演出し、歴史に刻まれる公演となった。

第9回はモーツァルト《魔笛》で、ダニエル・リプトン指揮するチューリヒ・シムフォニー・オーケストラに、エレナ・モシユクの夜の女王、ジュゼッペ・フィリアノティのタミーノ、マティアス・ゲルネ

のババゲーノ、ザラストロはフランツ・ヨーゼフ・ゼーリツヒ、バミーナ役にはアドリアーナ・マルフィージなどの豪華メンバーだった。

実行委員に不協和音が…… そして

第10回も《カルメン》に戻ったが、この年からフェスティヴァル・オーケストラが設立された。サラ・ムブンガが題名役に大抜擢され、アルベルト・クビードのホセ、当時まだ無名のニコラ・テステがエスカミリーヨに名を連ねていた。第12回のヴェルディ《トロヴァトーレ》ではルーナ伯爵にレオ・ヌツチとアルベルト・ガザレ、マンリーコ役もマルチェ

